

かくし味

日芸文芸楊七三

千葉
まひろ

眠れなかったので、スープを作ることにした。

冷蔵庫に残っていたキャベツと人参のかげら、棚の奥にしまいつばなしになっていたコンソメ粒子とトマト缶を引っ張り出し、水と一緒にコトコト煮る。キッチンだけ煌々と白熱灯が照らしているせいで居間は薄い暗闇が息づいている。

水がふつふつとする音だけがしている。ラジオをかけようか迷って、もったいないと思ってやめた。いつも音楽はかけなかったから。

とくべつ忙しい日々ではないのに朝帰りをすることが増えたのは、今年から付き合ひ始めた恋人のせいだろう。夜行型で滅多に外に出たがらない質であったので、デートと呼べるものは向こうの家で映画を見ることが多かった。

気だるい朝焼け前に、無精ひげの残った顎に触るのが癖だった。きりりと引きしまった一月の肌寒さで体温をいつもより高く感じる。男の二の腕に絡まってインスタントスープを飲むこと。流れるエンドロールに眠気をさそわれながら下着を脱がされること。薄まる夜の気配。そういったことに惑わされる男との逢瀬はさびしくて退屈だった。

「水族館に行きたいとか、小洒落たカフェに行きたいとか、そういうわけではないんだよ」

運ばれてきた餃子に箸をつけながら、美琴が怪訝そうな顔をする。

代官山に集合ね。ちよつと訝聞いてあげるから、と連絡をよこしてきたのは美琴のくせに食べつづけるばかりで視線も合わない。仕方なく、お通しで出された枝豆をかじる。話を聞くと言いながら興味を早々に失われるのはいつものことなので、私も慣れてきた。

「ただ面白くないな、って」

同じように餃子をつまむと、舌に鋭い熱が走った。

「まだ熱々だよ」

「先に教えてよ」

すみませーん、と店員を呼びとめ、レモンサワーを二つ注文する。金曜日の夜だから混んでいて、店員は立ち止まらずに、はいよ！と叫んだ。

「夜に恋人の家に行つて、映画見て、朝帰りすることのなにかつまらないの」

氷で舌を冷やしている間に六つあった餃子は半分以上減っていた。到着したレモンサワーを一息で真ん中まで飲み干した美琴は、変わらず眉間にしわを寄せたまま少なくなった餃子を取り皿にいれる。

「ただの映画じゃないの。流行りものだよ」

「いいじゃない」

「テレビですーっと告知されていたようなやつだよ。面白くないよ」

すみませーん、水餃子と揚げ餃子二人前。あとキムチ胡瓜ください。はいよ！

「頼みすぎじゃないですか」

美琴は無視して再びレモンサワーを煽る。

店内はますます活気づいてきた。流れる曲は中学生のときに流行っていたアイドルグループのものだ。今は解散して母になったり女優になったりしているらしい。新しくやってきた料理に押されて、空に近い枝豆皿が肩身狭そうにテーブルの端に追いやられる。

「意外性のある映画がよかったってことね」

そういうわけじゃない、と言いかけると、

「あのね、アンタの言うところのつまらないは、世間じゃ別に普通なの。どうして出不精の男と付き合ったのよ。刺激がほしいなら連れ回すような奴と付き合って」

それは元カレですよ、と言ったら、最後の餃子を食べられた。

夜行性で出不精の映画センスが最悪な男と別れたのは一週間前のことだ。

終わりは呆気なかった。もとより向こうは大して気持ちが悪かったのだろう。どうせ酒の勢いから生まれた関係だ。お互い一時のさびしさを埋め合っただけに過ぎない。

「あちち」

覗き込むと湯気が頬にぶつかかった。味見をくり返しても薄く感じて、コンソメ粒子を足す。インスタントの塩辛さに舌が慣れてしまったらしい。

恋人期間が終わっても、生活リズムが健康になっただけで、日々はそれほど変わらない。

きつと元恋人も変わりなく夜を過ごすだろう。

せめてもう少しくらい、大切に作る素振りを見せてほしかったな。

「真夜中と夜明けの間で、私は未練がましくスープを作る。」